



文学部

准教授 **木村 博子**さん

Kimura Hiroko

●プロフィール

- 1953年 福岡市生まれ
- 1972年 福岡女学院高校卒業、東京芸術大学音楽学部楽理科入学
- 1976年 同大卒業、同大学院音楽研究科音楽学専門課程入学
- 1978年 同大学院修了。修士論文は「モンテヴェルディの第2の作法に関して」。修了と共に郷里に帰り、福岡教育大学非常勤講師。熊本大学教養部助手
- 1980年 熊本大学教養部助手
- 1997年 熊本大学文学部助教、音楽療法研究開始。

音楽療法によって人々を幸せに。

モンテヴェルディの研究で音楽を通した人間探求のおもしろさを知る

木村さんは幼少時から音楽を習い、一般大学か音楽に進むかで悩んだ高校2年のとき、恩師のすすめで芸大進学を決めました。大学では西洋音楽史を専攻し、学部時代は19世紀のオペラ研究、大学院では初期バロックの作曲家モンテヴェルディを研究しました。「ルネサンス期の音楽は古典的な形式でしたが、バロックに移行するにつれ、人間の感情や内なるドラマを音で表す動的な形に変わっていきます。モンテヴェルディはオペラを確立したイタリアの作曲家ですが、人間の様々な心理を的確に音で表現する直感型の作曲家です。彼の研究を通して音楽は人間性のあらゆる面につながっていることを実感しました。」

音楽療法との出会いで、音楽への思いがさらに深くなった

福岡教育大学で非常勤講師をしていた時、熊本大学から教養部助手の公募があり、熊本へ。最初から自分の研究室がある助手としてスタートしました。教養部では初めての女性教官だったので、紺やグレーのスーツを着て目立たないようにしたそうです。国連の世界女性年の制定もあり、働く女性への理解も深まって、男性教官も対等に接してくれました。

「音楽史の研究を中心にやってきましたが、10年前から音楽療法に取り組んでいます。音楽療法は20世紀初頭から欧米で盛んになったもので、日本では単に好きな曲を聴いてリラクゼーションをすることと思われがちですが、本来は病院や福祉施設で行われるより専門的なものです。音楽と人間の深い関係を考えると、それが療法として見直されることはある種の必然であったとも思えるのです。私の中でもコミュニティ音楽療法という、地域に開かれた新しい形の音楽療法を実践研究しています。」

音楽を研究することは、とてもエキサイティングです

音楽のほかにも進むべき道があったのではと自問したこともあったが、音楽の良さが年々わかるようになったという木村さん。研究を続けてこれたのも家族の協力や同僚の理解があったからこそ。「夫は自営業で多忙ですが、できる限り子どもの面倒も見てくれました。また娘は小さい頃身体が弱く、急に大学を休まなければならないことも多かったのですが、そんな時同僚はとても協力的でした。無言のうちの彼らの温かい配慮がなかったら、仕事はとて続けられなかったでしょう。」「家事や雑務に分割され、なかなかまとまった時間がとれないのが悩みの種ですが、睡眠時間を削ってでも研究することはエキサイティングです。音楽は演奏したり聴いたりするのももちろん楽しいですが、人間の探求という視点から研究することにはワクワクするようなたくさんの発見があるのです。」

今年（2008年）7月、木村さんはアルゼンチンで開かれる世界音楽療法会議に出席してコミュニティ音楽療法についての研究発表を行います。「音楽療法的な観点から音楽史を見かえすと、人間にとって音楽とはいったい何だったのかという大きな問題が見えてきます。音楽研究の楽しさは尽きない人間への興味なのです。」

以前はクラシック中心だったという木村さん、最近は童謡や演歌、Jポップや民謡などにまで手を広げて、毎日がますます楽しくなったそうです。



キャンパスで学生と一緒に